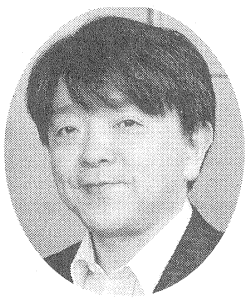
私見創見 Thursday

親の言葉

子どもの将来の道しるべ



畑山　篤
志学塾塾長

はたやま・あつし
1960年、八戸市生まれ。明治学院大卒。志学塾を運営しながら、全国各地で講演。「勉強部活」を提唱、放課後学習支援などに関与する。全国学習塾協会理事。

今年も「第3回全県テスト」が、加盟する約150の学習塾を会場に、3日に県内一斉に行われる。中学3年生を対象にした志望校判定模試で、12月から各中学校で始まる3者面談前としては最後の合否判定データとなる。

普通高校に進学すれば、高校2年生で理系か文系かを選択することになるので、あと1年間は〝将来〟を先送りできる。しかし、実業高校の場合、工業系なら機械科、電気科、電子科、電子機械科、情報技術科など、農業系なら生活科学科、動物科学科、植物科学科、生物生産科などから、早急に選択しなければならない。

子どもを取り巻く環境は安全で、便利が第一で、豊かになった。その中で勉強、運動、習い事と、わが子の幸せな人生のために「やりたいことをやらせたい」という親が増えた。しかし、子どもは中3の10月になっても、十中八九が「やりたいことは決まっていません」と答える。

確かに職業の選択は自由であり、子どもは「将来の夢」に向かって、高校や大学などの進路を自由に選択して行くはずだ。しかし、多くは自由の意味や選択の仕方を教わる機会に恵まれていない。

ゆとり教育が導入され、特に進路選択に関しては、学校でなく家庭の自己選択・自己責任という時代になった。親が「本人に任せます」と〝理解〟を口にするだけでは、子どもは選ぶ術を持てない。

子どもが夢を探すためにはどうしたら良いか。それは、たくさんの言葉に出会うことだ。ゆとり教育世代の子どもは、未経験なことが多く、そして未熟だと思う。

先日の中2の授業。イモリ、ヤモリが両生類か爬虫類かが授業のポイントだった。しかし、最近は鳥が卵から生まれ、われわれ人間にはへそがある―という当たり前のことも認識していない子が増えた。

テキストにはバッタや鳥などの挿絵が並び、「次の中から（1）爬虫類を選べ（2）ほ乳類を選べ」とあった。A君が全部間違えていたので「これは？」と挿絵を一つずつ指しながら口頭で答えさせた。「はい、ほ乳類、爬虫類。ほ？　あ、はちょう類！」。教室中が爆笑だった。

「爬虫類は、へそがない、ほ乳類はへそがある」。少し力説してしまった。それでもA君がポーッとしているので、「君は？」と尋ねた。すると「はい、人類です」と真顔で答えた。

気を取り直し、ほ乳類の例示を増やそうと、「アフリカにいる動物は？」と質問した。B君が自信なさげに、「ゾウ」と答えた。「そうだ、ライオンとか…」と説明し始めると、Cさんが「先生、ライオンはヨーロッパです！」と張り切って発言。

この頃は、お茶の間に流れる動物番組も少なく、しかもチラ見では地理的な興味などは湧かないだろう。最後に「大陸ごとに生息している動物がいる。どこにいるか興味はないか？」と続けた。クラスは静まった。しばらくしてDさんが「動物園にみんないます」と…。

高度情報化社会の中にあっても、心に染みる言葉との出会いは乏しいものだ。特に子に対する親の思いは言葉を尽くして伝えたい。

親の職業、親のやりたかったこと、なぜそれを諦めたのか…。子が自分の将来に真剣に向き合った時、伝える機会を持ちたいものだ。人間関係ができた人の言葉が腹に落ちる。

親の言葉を通し、単純に見えていた日々の繰り返しの中で、子は複雑という面白さを味わい、その経験が想像力の本質になっていくだろう。親の言葉は子どもの将来への道しるべだ。

憲法公布70年

平和の理念「心燃えた」

旧文部省が1947年に発行した「あたらしい憲法のはなし」。平易な言葉で戦争放棄など憲法の理念を説明した教科書を、ジャーナリスト隅井孝雄さん(80)＝京都市＝は小学生の時に読み、「世界の人々の理想があると心が燃えた」。復刻版を今も手元に置き、9条維持を訴える隅井さんは「今の政治家たちにも読ませたい」と語る。

【5ページに関連記事】

「戦争放棄」と書かれた釜に兵器が入れられ、代わりに光輝く列車や船が出てくる―。小学6年の授業でこの教科書を手にした隅井さんが、最も印象に残った挿絵だ。

憲法施行から3カ月たった47年8月の発行で、表紙に国会議事堂が描かれていた。「表紙は色刷りでまばゆく見えた」

隅井さんは東京で生まれ、日本テレビ記者などを経て京都の大学で教壇に立った。現在は「憲法9条京都の会」世話人や、コミュ

教科書、反戦の原点

ちとラジオを囲んで玉音放送を聞いた。

東京に戻ると、小学校で教科書の軍国主義的な記述に墨を塗ったり、紙を貼ったりさせられた。「学校教育と教師、社会や権威が崩壊した」。「憲法のはなし」を使った授業では「今後は戦争をしない」と教師が言うことに驚き、主権在民との言葉を初めて知った。「民主主義に目覚め、しつこいぐらい戦争放棄にこだわるようになった」原点だ。

特に心が躍ったのは戦力不保持を定めたを、ほかの国よりさきに行ったのです。世の中に、正しいことぐらい強いものはありません」

いま、自衛隊の任務を拡大する安全保障関連法が施行され、衆参両院で改憲勢力が3分の2を占める。隅井さんが思い浮かべるのは「いくさをしかけることは、けっきょく、じぶんの国をほろぼすようなはめになる」との記述だ。「改憲を主張し、自衛隊を軍隊に変えようと主張する政治家たち」に、憲法の平和主義の原則を改めて

400人 練習の成果披露

特別支援学校技能検定

青森県教委 本大会初開催

清掃分野で丁寧にモップ掛けする生徒（手前）＝2日、青森市

青森県教委は2日、青森市で特別支援学校高等部の生徒を対象にした技能検定と発表会を開いた。1月にプレ大会を実施しており、本大会の開催は今回が初めて。県内16校から約400般の検定と同様、履歴書などに記載して就職の際のアピール材料の一つにすることができる。生徒の就労や学習意欲の向上につなげようと、県教委が昨年から検討委員会などを開催し、実ビス、パフォーマンスなど6分野に参加。清掃は、テーブル拭きやモップ掛け、接客では、注文を受けてからテーブルを片付けるまでの動きを行った。パフォーマンスでは、歌やダンス、器楽の演奏などそれぞれの得意分野で練習の成果を発揮した。

パフォーマンスにエントリーした八戸第二養護学校3年の山内明音さん(18)は取材に「緊張したが練習の成果が出せて自信が付いた」と笑顔で話した。

（福田駿）

◆最高裁人事（3日）
▽青森簡裁判事（仙台簡裁判事）＝青森県関係分